第3回 エルトゥールル号からの恩返し

日本復興の光大賞17

特定非営利活動法人 日本トルコ文化交流会

〒160-0023　東京都新宿区西新宿1-19-8　新東京ビル8F　TEL：03-5909-4025　FAX：03-5909-4024

nittoKAI

特定非営利活動法人 日本トルコ文化交流会 主催

ごあいさつ

私は日本に来て20年を越えていて、考え方も日本人かトルコ人かわからなくなってきています。東日本大震災のときは、日本を離れていましたが、妻と子どもたちは残っていました。ニュース映像を見て、心が揺れ、その後すぐ日本に戻ってきました。

外国人の多くは震災後すぐに日本を離れましたが、私は被災地のために何かできないかと考え、食事や物資を運ぶなど色々な活動を行ってきました。何回か自分でも足を運び、現地の人が何をどういうふうに悩んでいるかがわかりました。時間が経つほどに、必要な支援内容も変わってくるのを実感しています。

3年前、我々nittoKAIとして、どんなことをすべきか考えていました。当時、池上彰先生とは特につながりがありませんでしたが、東工大で教えていらっしゃることをウェブサイトで知り、メールで連絡したところ、相談にのってくださいました。先生に審査委員長になっていただけないかお願いしたところ、お忙しい中、時間を作って引き受けてくださり、現在にいたるわけです。

今回で、「日本復興の光大賞」は第3回目を迎えることができました。審査委員の皆様には心よりお礼を申し上げます。現地に私も何回か赴き、多くの素晴らしい方々と出会って、元気をいただいたことも、時には涙を流したこともありました。我々は、この賞を2020年まで継続していきたいと考えており、これからも頑張ってまいります。

NPO法人 日本トルコ文化交流会
理事長
ウグル　ユジェル
工学博士

目次

ごあいさつ ---------- 02
日本復興の光大賞17とは ---------- 03
　賞の趣旨／選考方法／後援 ---------- 03
　審査委員 ---------- 04
　池上審査委員長による講評 ---------- 05
受賞団体紹介 ---------- 06
　特定非営利活動法人TEDIC ---------- 06
　3.11絵本プロジェクトいわて ---------- 08
　石巻専修大学 山崎泰央ゼミナール ---------- 10
　特定非営利活動法人がんばろう福島、農業者等の会 ---------- 12
表彰式レポート ---------- 14
来賓からのメッセージ ---------- 16
メディア紹介 ---------- 18
nittoKAIとは ---------- 19

エルトゥールル号からの恩返し 日本復興の光大賞17とは

賞の趣旨

明治時代に日本を訪問したトルコ・オスマン帝国の軍艦エルトゥールル号はその帰途、和歌山県串本町沖で岩礁に激突、爆発するという大惨事に遭遇しました。地元住民による必死の救助も虚しく 587 人が死亡、生存者はわずか 69 人でした。しかし、日本全国から義援金が寄せられ、生存者は日本の軍艦でトルコまで無事に送還されたのです。トルコ国民は日本人の厚意に心から感謝し、この出来事は両国友好親善の礎となりました。

2011 年 3 月 11 日に発生した大地震による東日本大震災は、岩手、宮城、福島の 3 県を中心に甚大な被害をもたらした、戦後日本最大の自然災害といわれています。世界中が支援の輪を広げる中、トルコからも官民による支援がなされ、nittoKAI も数日にわたって炊き出しを行ったり、被災地の子供たちを元気づけるためトルコ旅行に招待したりするなど、様々な活動に取り組んできました。

しかし 6 年の月日が経ち、震災の記憶の風化が懸念されています。nittoKAI ではエルトゥールル号遭難の際に受けた支援への恩返しと、友好国・日本の一日も早い復興支援のため、2015 年に「エルトゥールル号からの恩返し 日本復興の光大賞」を創設しました。ジャーナリスト・池上彰氏の全面的な協力を得て、復興のため地道に尽力している民間団体から特に優れた団体を選び、その活動や想いを世に広め、さらなる日本・トルコの友好関係発展を願うものです。

選考方法

第 3 回目となる「日本復興の光大賞 17」は、事務局が東日本大震災の復興に携わる団体等の推薦を含む東北 3 県の候補団体にアンケートを依頼し、約 40 団体から回答を得ました。さらに事務局と理事長をはじめとする理事のメンバーによる一次審査で、岩手県 17 団体から 7 団体を、宮城県 14 団体から 12 団体を、福島県 7 団体から 6 団体を選び、合計 25 団体の現地訪問を行い、11 の最終候補団体を選出、最終的に池上彰氏を審査委員長とする審査委員による 2016 年 12 月 19 日の本審査会で大賞 1 団体、特別賞 3 団体を決定しました。

「選考基準」
（1）地元に密着して、草の根で頑張っている民間団体。人知れず、地道に活動を続けている「縁の下の力持ち」である団体に少しでも光を当てる。
（2）被災地、被災者のために 10 年、20 年、50 年と長期的な視点に立って地道に活動している団体とする。活動の成果が、必ず地元に還元されるように取り組んでいるところとする。

後援

外務省、復興庁、岩手県、宮城県、福島県

審査委員

審査委員長：　ジャーナリスト　池上 彰 氏

ジャーナリスト。1950 年長野県生まれ。慶応義塾大学経済学部卒業後、1973 年 NHK 入局。報道記者として、さまざまな事件、災害、問題などを担当する。1994 年 4 月から 11 年間「週刊こどもニュース」のお父さん役として、様々なニュースを解説。2005 年よりフリージャーナリストとして、書籍やテレビなど幅広いメディアで活躍中。2012 年 4 月より 16 年 3 月まで東京工業大学大リベラルアーツセンター教授。現在は名城大学教授。主な著書に『伝える力』（PHP ビジネス新書）、『いま、君たちに一番伝えたいこと』（日本経済新聞出版社）など多数。

審査委員：　女優　宮本 信子 氏

女優。1945 年北海道生まれ。1963 年文学座付属演劇研究所、1964 年劇団青芸在籍時に別役実作「三日月の影」で初舞台。1988 年「マルサの女」でシカゴ国際映画祭最優秀主演女優賞、第 11 回日本アカデミー賞最優秀主演女優賞など多数受賞。2007 年映画「眉山」（東宝）で第 31 回日本アカデミー賞優秀助演女優賞を受賞。2011 年「阪急電車 片道 15 分の奇跡」で、第 36 回報知映画賞助演女優賞、第 35 回日本アカデミー賞優秀助演女優賞など多数受賞。2014 年、第 65 回日本放送協会放送文化賞受賞、春の紫綬褒章を受章。

審査委員：　立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科教授　長 有紀枝 氏

1963 年東京生まれ。早稲田大学政治経済学部政治学科卒、同大学院政治学研究科修士課程修了。1990 年より NGO の国際協力に携わる。東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム博士課程修了（学術博士）。2009 年 4 月より立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科教授。2010 年 4 月より同大学社会学部教授。著書は『入門 人間の安全保障』（中央公論新社）など多数。

審査委員：　立命館大学准教授　開沼 博 氏

立命館大学衣笠総合研究機構准教授。1984 年福島県生まれ。東京大学文学部卒。同大学院学際情報学府修士課程修了。東日本国際大学客員教授。福島大学客員研究員。Yahoo! 基金評議委員。これまでに、福島原発事故独立検証委員会（民間事故調）ワーキンググループメンバー（2011-2012）、復興庁東日本大震災生活復興プロジェクト委員（2013-2014）等を歴任。著書は『はじめての福島学』（イースト・プレス）、『漂白される社会』（ダイヤモンド社）など多数。

審査委員：　特定非営利活動法人日本トルコ文化交流会　理事長　ウグル･ユジェル

1972 年トルコ生まれ。1995 年に文部科学省の国費留学として来日。1995 年東京工業大学物理情報工学博士課程を修了。日本では、オリンパス株式会社、日本ナショナルインスツルメンツ株式会社、SAS Institute Japan 株式会社 に勤め、現在に至る。2010 ～ 2014 年青山学院大学で非常勤講師。2011 ～ 2014 年東京大学で共同研究員。2013 年日本工学教育協会から JSEE アワードを受賞。2006 年より年日本トルコ文化交流会の理事長を務め、国際交流の推進に尽力する。

池上彰審査委員長による審査経過と講評

今日はお忙しい中、皆さん、お越しいただいてありがとうございます。そして、去年あるいは一昨年、受賞した方々の懐かしいお顔も見られて、引き続き皆さんがよく活動されていらっしゃるなと大変嬉しく思っております。

最初に理事長からお話がありましたように、トルコの方々が日本に恩返しをしたいというのがありまして、私たちもいろいろやらなければならないことがあるのに、トルコの人たちまで考えてくださっているのか、ありがたいことだ、では私たちもできることで協力しようということで（「日本復興の光大賞」が）始まりました。

今回の場合ですと、トルコ側、あるいは日本側の事務局の人たちが、いろいろな調査をして、さあ、どんな活動をしていらっしゃる方々がいるのかなということで、40 の団体をまずリストアップし、アンケートの結果から、25 の団体に実際に足を運んでいろいろな聞き取り、あるいは本当にどんな活動をしているのか、というのを調べたんですね。そしてその豊富な資料を持ち帰って、さらに審査をした結果、11 団体に絞り、その段階で私たち審査委員が 11 団体を、それぞれどういうことをやっているんだという話を伺いました。

その上で、本当にいろいろな団体、みんなにあげたいよね、という思いはあったわけですが、やはり枠というのがございまして、その中でどうしようかというときに、私たちは、なかなか光が当たらないけれども、着実に地道に活動している人

たちを応援したいという思い、それから、あれから 6 年が経とうとしているわけです。被災地の様子も大きく変わろうとしている中で、変化に対応しようとする形での取り組みをしている団体はこれからも地道な活動をしていくことができるだろう、これからも活動を続ける力を持った人たちを応援したいという思いから、このあと表彰を受ける団体を選ばせていただいたということです。受賞した皆さん、本当におめでとうございます。

大賞

特定非営利活動法人 TEDIC

https://www.tedic.jp/

設立年月：　2011年5月12日
代表理事：　門馬 優
所在地：　宮城県石巻市

東日本大震災発災後、立ち上げメンバーであり、現代表理事である門馬優が、故郷の被災をきっかけに、当時籍をおいていた大学院の同級生に声をかけて、2011年５月に設立しました。当時は、避難所での学習支援活動に取り組む学生団体として活動し、その後復旧・復興のフェイズが変化していく中で活動内容も変化。現在では、被災の有無に関わらず、「地域には声をあげられない子どもたちがいる」ことを受け止め、貧困やネグレクトなど、子ども自身の力ではどうしようもできない環境に置かれる子どもたちを支えることを目的として活動しています。

活動の原点は、「震災がきて、救われた。」といったある男の子の言葉です。この男の子は、元々ある事情で学校に通うことができず、また両親が震災直前に失職し、精神的な荒れを何度もぶつけられていた生徒でした。津波によって避難所生活を余儀なくされたことで、たくさんの人たちの目に触れ、家庭に対しても、彼の不登校状態に対しても支援が入ったそうです。

「僕はまだ幸せ。でも、津波が来なかったら一生このままだったと思う。石巻以外の日本には、そんな津波とかが来なくて、僕みたいに気づかれないで苦しんでいる人がたくさんいると思う。そんな人たちを助けられるように、将来なりたい」

彼の思いは、僕たちの思いでもあり、私たち法人の使命でもあると思っています。

主な活動内容

一緒に夕食を食べたり、宿題に取り組んだりする夜の居場所

経済的に困窮していたり、養育環境の整わない子どもたちを主な対象とし、チューターと呼ばれる大学生ボランティアが宿題に一緒に取り組んだり、夕食を食べたりして過ごします。様々な事情で自宅から出られない子どもたちもいるため、ケースによっては訪問することで支援を届けます。

不登校の子どもたちが利用するフリースクール

不登校だったり、学校を休みがちだったりする子どもたちが通うフリースクールです。自主学習のサポートや、釣りなどの体験活動、児童館でのスポーツや音楽など、様々な活動を通じて、少しずつ子どもたちの中にエネルギーを溜め込んでいきます。

関係機関との連携で包括的支援を目指す

子どもが抱える困りごとの背景には、失業、疾患、借金、薬物、障害など様々な問題が複合的に絡み合っており、１つの支援プログラムで支えることは困難です。児童相談所や SSWer などと連携しながら、このようなケースを支えていきます。

活動において評価された点

審査委員長　池上 彰氏

貧困、不登校に悩む子どもを救うさまざまな活動

この度は本当におめでとうございます。

審査委員が色々な団体の話を聞いて、大賞は一つの団体ということになっているものですから、身を切られる思いでこの団体を選びました。

TEDICは、もともと子どもの貧困の問題にずっと取り組んでいます。また、それだけではなく、以前から日本全国で問題になっていたのですが、東日本大震災の被害によって新たな形で顕在化している不登校などにも、どのような支援活動が必要か、ということで、実にさまざまなところで子どもたちへの支援活動をしています。

子どもというのは未来を支える宝です。その子どもたちに対して、さまざまな活動をしていることを私たちは高く評価し、これからもぜひ頑張っていただきたいという願いを込めて選びました。おめでとうございます。

受賞者コメント

この度は大賞に選んでいただきありがとうございます。

私たちが関わる子どもたちの中には、「いままで、よく生きてこられたね･･･」「こんな状況だったら、自分は生きることを諦めてしまうかもしれない。」思わずそう思ってしまう子どももいます。今日も本当は一緒に活動しているスタッフやボランティアの大学生、あるいは子どもたちも、みんな一緒に来られたらよかったのですけれども、なかなか難しい状況もあり、私一人でやって参りました。

今でも、私たちが活動している意味が本当にあるのか、私たちがいることでこの子たちの人生が本当に変わるのか、その確信を持てずに活動しています。

復興の光大賞に、「光を当てる」という言葉がありました。私たちが関わる子どもたちは、もしかしたら、学校や家庭、地域の中でも光が当たっていないのかもしれません。そんな子たちが必死に私たちに助けを求めてくれる、そこにすら私たちが光を当てられなくなってしまったら…と思いながら、なんとか1日1日、目の前の子どもたちのために活動しています。

東日本大震災の影響もあり、今もなお、たくさんの子どもがいろいろな思いを抱えながら生活しています。一方で、震災以前から、「本当に死にたい」「こんな人生やめたい」などと思いながら、それを言葉にすることも、誰かにぶつけることもできない子どもたちがいたことも、また事実です。

ある男の子は、震災があったために、避難所でNPOの方々と出会うことができ、支援に繋がることができました。「震災がきて、救われた」と話してくれました。

その男の子と1年、2年と関わるうちに、こんなことを話してくれました。

「自分はラッキーだと思う。たまたま震災があったこの場所にいたから救われた。でも全国にはそうじゃない子がたくさんいる。自分と同じような思いをする子を一人でも助けられるように、勉強して大学に行って、日本の学校、教育を変えたい」

私が活動を続けているのは、この子の言葉に応えるためだと思います。そして今日こうやって光を当てていただいたことにより、全国で誰にも声を上げられずにいる、でも実は皆さんの近くにいるかもしれない子どもたちに、何かしらの光が当たることを願っています。そんなきっかけに今日の大賞がなれば幸せです。

この度は本当にありがとうございました。

特定非営利活動法人TEDIC
代表理事
門馬 優さん

特別賞

3.11絵本プロジェクトいわて

http://www.ehonproject.org/iwate/

設立年月：　2011年3月24日
代表：　末盛千枝子
所在地：　岩手県盛岡市

震災後の平成 23 年 3 月 24 日に発足し、同月 31 日からボランティアによる作業を開始。全国からの協力により集まった絵本は、平成 29 年 3 月までに 232,696 冊。平成 29 年 3 月までに、333 ヵ所（北は青森県八戸市・南は福島市）へ 116,950 冊の絵本を寄贈。「えほんカー」で自分の好きな本を選べるということで、被災地の子どもたちには大変喜ばれ、保育所では保育士の先生にも絵本を選んでもらっています。また、被害の大きかった自治体（ボランティア団体含む）へ、絵本を満載した「えほんカー」を 5 台寄贈しました。

絵本サロンプロジェクトでは、絵本があって、ほっとできる場所を「絵本サロン」と名付け、被災地に住んでいる絵本好きの方々にノウハウを伝えていこうという『試して伝える』事業を行うほか、サロン開設の費用の一部を支援しています。

読み聞かせや絵本の寄贈以外にも、絵本の力を活用できる多様な活動について、被災地に寄り添い取り組んでいます。

活動は 10 年と予定しており、2020 年の終了までに、被災地に住んで絵本による活動に取り組んでいる方々との交流をより深め、それぞれの土地の人たちがプロジェクト終了後も末永く子どもたちに関わっていくことができるような方向付けの手伝いをしたいと考えています。

主な活動内容

仕分けと配送

仕分けのボランティアは、本好きの主婦、元保育士、社会教育ボランティア、読書ボランティアなどです。この活動に参加するということは「使命感」だけではなく「救い」をもたらす効果もあり、交通手段や家庭生活で制限が大きく、思いを胸にしまいこんで切ない気持ちになっている方々に感謝されました。配送は舞台関係の仕事が震災によりキャンセルとなった会社の協力を得て、トラックを使用することができました。

えほんカープロジェクト

The IBBY Motorbike Librariesをお手本にして、軽トラックを改造した日本初の移動図書館車「えほんカー」を6台つくり、1台はプロジェクト専用、5台は沿岸被災地の自治体や市民団体に寄贈しました。「えほんカー」で被災地に出かけ、子どもたちにお気に入りの本を選んでもらいプレゼントしています。特別な免許が無くても運転できる移動図書館車を導入する自治体も出ています。

絵本サロンプロジェクト

絵本があって、ほっとできる場所、それを「絵本サロン」と名付け、盛岡のボランティアのアイデアで、いろいろな企画を考え、絵本サロンを運営してみて、被災地にお住まいの絵本好きな方々にノウハウを伝えていこうという『試して伝える』プロジェクトです。
活動拠点の盛岡市中央公民館で試してみて、被災地に出かける「出張絵本サロン」で伝え、被災地での絵本サロン開設のお手伝いをしています。

活動において評価された点

審査委員　宮本 信子氏

絵本の力で子どもと大人を元気にする活動

私は、子どもたちのことがいつも気にかかっていました。この3.11絵本プロジェクトいわてさんの「えほんカー」の資料を拝見しましたら、子どもたちがこう、自動車のところから、一生懸命こういう風に絵本を高く掲げたり、一生懸命大事そうに抱いている姿がありまして、感激いたしました。

末盛さん、この（子どもたちへ絵本を届けるプロジェクトの）アイデアと、それから企画して行動することは、本当に素晴らしいなと思いました。そして、その絵本を子どもたちが読んで励まされます。子どもたちが元気になると、大人も元気になります。素晴らしいプロジェクトをありがとうございました！おめでとうございます。

受賞者コメント

本当に今日はありがとうございました。私はたまたま震災の 1 年前に東京から岩手に引っ越しまして、そして長い間絵本に関わってきて、IBBY と呼ばれる国際児童図書評議会という世界中の困難の中にいる子どもたちに本を送る組織に携わってきたのです。そうしたところ岩手で震災に遭い、自分がここにいるということは、何かしなさいということだと思い、今日もたくさん来てくれた岩手の仲間たちが集まって、これまで活動しております。

本当にものすごい数の絵本が集まり、日本中の人が絵本に希望を託しているのだと実感いたしました。そして IBBY がいち早く私たちを支援してくれたことに、本当に励まされました。また今も年金支給の月に必ずお金を送ってくださる方などもいらっしゃるのです。そういう人たちに励まされながらやっております。

震災の翌年にロンドンであった IBBY の世界大会で、震災の報告をした際には、私たちがこの事態をどう受け止めようとしているか、皆さんに知ってもらいたいと思いました。というのも、大変なのは私たちだけではないと思ったからです。

NHK でその頃始まった「花は咲く」という歌に英文のテロップをつけてほしいと NHK にお願いしたところ、担当の方が、ロンドンで使えるように作ってくれました。

ロンドンでは、世界中の代表者たちが英文のテロップを見て、泣きながら会場から出てきて、「本当にありがとうね」と言ってくれました。やはり世界中でそれぞれ皆が困難の中で生きているんだ、と思いました。IBBY にはもちろんトルコも加盟していて、多くの人たちにサポートされていると心から思います。

最後に、石井桃子さんが残された本当にすばらしい言葉を紹介したいと思います。「大人になってからのあなたを支えるのは子ども時代のあなたです」。私たちの活動だけではなくて、子どもと関わる人たちにとって、これ以上の言葉はないと思っております。

今日は本当にありがとうございました。

3.11絵本プロジェクトいわて
代表
末盛 千枝子さん

特別賞

石巻専修大学
山崎泰央ゼミナール

https://www.facebook.com/yamazaki.zemi/

設立年月：　2011年4月1日
担当教員：　山崎泰央
所在地：　宮城県石巻市

「石巻の力になりたい！」ゼミナールの第1期生 13人から声が上がりました。2011年5月の臨時ゼミでの出来事です。担当教員は松山大学から転任してきたばかり。ゼミ生も石巻出身は 1人だけ。学生、教員ともに、土地勘や人の縁もないなか、手探りの活動が始まりました。

最初に手がけたのは大学の周りに陸続と建設されていた、開成・南境地区仮設住宅団地の生活実態調査でした。そこで明らかになった「収入」「移動」「子ども」に関する問題を解決するために、支援活動をスタートしました。それから 6年間活動を継続しています。現在は、仮設住宅で「TAKE10体操教室」を実施し、復興公営住宅で団地会と共同して食事会を開くなど、コミュニティづくりのお手伝いをしています。

さらに、2014年からは震災の風化防止を目的に「復興ボランティア学ワークショップ」の全国展開をしています。これまで、北は岩手から南は熊本まで 50カ所以上で開催し、受講者はおよそ 1000人に達しています。

私たちの支援活動は復興支援団体のように毎日はできません。しかし、そうした制約がありながらプロの団体と遜色のない成果があると自負しています。今後も限られた人数と時間のなかで、さらに効果的な支援活動を考え、実行をしていきます。

主な活動内容

仮設住宅生活実態調査

2011 年から現在まで仮設住宅の調査を継続しています。石巻専修大学は東北最大級の開成・南境仮設住宅団地に隣接しています。2011 年当時、私たちが支援活動を取り組むにあたって、現状やニーズを明らかにするために始めました。住民さんとの信頼関係を築くために、1 戸 1 戸直接訪問して調査しています。調査結果は支援活動へ反映するとともに公表もしています。2016 年からは「あけぼの北復興住宅」でも調査を始めました。

「TAKE10」体操教室

仮設住宅生活実態調査の過程で「身体を動かす機会が減った」「家にこもりがちになった」などの声がありました。住民さんの健康維持のため、運動をする機会と集まって交流する場が必要だと考えました。そこで、2013年より NPO法人国際生命科学研究機構の健康プログラム「TAKE10」の提供を受けて体操教室を始めました。いまでは授業の空き時間を使って仮設住宅に訪問し、住民さんとの交流を楽しんでいます。

復興ボランティア学ワークショップ

2014 年から震災の風化防止のために「復興ボランティア学ワークショップ」を全国各地で展開しています。復興過程で生じている問題は元々地域に内在しており、同様な問題はどこの地域にも存在しています。このワークショップは参加者一人一人が「自分ごと」として地域で「できること」を考えるプログラムです。2016 年は大地震のあった大分・熊本へも赴き、学生や地域の復興のリーダー、行政職員たちと震災復興について対話をしてきました。今後もこの活動を全国展開していきます。

活動において評価された点

審査委員　長 有紀枝 氏

ゼミ教授と学生がバトンし続ける「復興ボランティア学ワークショップ」

まず始めに、この賞に関わらせていただいていることに、心より御礼申し上げます。私どもは、世界各地で、難民支援・被災者支援を行っています。

トルコとのご縁は2011年にトルコで地震が起こった際、宮崎淳さんが地震で亡くなられたことに端を発しています。その時にエルトゥールル号の恩返しだといってこちらのnittoKAIの皆さん、そしてトルコの皆さんが示してくださった、本当に熱い思いに今も感謝の思いでいっぱいです。

各地でこの震災を機会に、あるいは阪神大震災の折にも、たくさんの大学の皆さんがサークルで、ゼミで活動しました。多くの方々がそういった活動をしていますが、それを継続することは本当に難しいことです。一般のNPOでも継続は難しいのですが、毎年学生が変わる大学のゼミでこうした活動を続けていくのは貴重で、そのご苦労はうかがい知ることができません。

そうした中、こちらのゼミナールは活動を継続してこられました。ご自身たちの紹介の中で、「活動すればするほどお金が苦しくなる」「少しでも外に広めていこうと色々な所に出向けば出向くほど苦しくなる」と話されました。それでも続けてこられたことに心から敬意を表します。

皆様の活動の継続が、日本全国の高校や中学、あるいは大学教育の中で、こうした被災地の復興支援に携わっている皆さんを応援することにもなると固く信じております。

この度は本当におめでとうございます。

受賞者コメント

本日は素敵な賞をいただきありがとうございます。改めて、私たちの活動を支えてくださった皆様に感謝を申し上げます。私たちの活動は 2011年から始まりました。この賞は山崎ゼミの現役学生のみならず、卒業生ともどもいただいた栄誉です。

山崎ゼミは NPOやボランティア団体ではありません。大学の教育過程の中の少人数教育の一クラスです。2011年当時、13人の学生と仮設住宅支援活動を始め、今年、第 4世代の卒業生を送り出します。学生は学業とアルバイトの合間を縫って復興支援活動に力を尽くし、他の支援団体とも遜色のない活動をしてきました。

さて、あえての批判を覚悟して言います。これからの復興支援は、満たされないこと、足りないことを埋めようとするマイナスからの発想ではいけません。それでは、いつまで経っても埋まらないギャップに、苦しんだり悩んだりすることになります。

最近読んだ、有川浩の『旅猫リポート』という小説にこんな一節がありました。猫のナナが飼い主のサトルとの別れを覚悟してこう言います。「サトルが僕を飼えなくなっても、僕は何も失わないんだ。ナナという名前とサトルと暮らした 5年間を得ただけなんだ。それはサトルと出会わなかったら絶対手に入らなかったことなんだ。」

満たされないものばかりを見ていては、目の前にある問題にしか目が届きません。そういう視点で問題を解決しようとすれば、つぎつぎと問題に目移りをしてしまいます。しかし、猫のナナのように「僕は何も失わないんだ。得ただけなんだ。」と考えると、未来に目が向きます。

今、私たちが力を入れて、全国で展開している活動に、復興ボランティア学ワークショップがあります。そこでは震災復興を学ぶだけでなく、地域の未来を考えます。私たちが望む未来は、震災復興で起きた問題を繰り返さないことです。復興の過程で起きている問題は、きっと皆さん 1人 1人の身の回りで、既に起きているのです。

今日、皆さんにワークショップの資料をお配りしています。どうぞワークショップを皆さんの地域、そして組織で開催してください。ちなみに多少の対価はいただきます(笑)。

私たち山崎ゼミナールは未来を作ります。被災地だけでなく、日本の未来を作ります。本日は特別賞をいただき、ありがとうございました。

石巻専修大学
山崎泰央ゼミナール 教授
山崎 泰央さん

特別賞

特定非営利活動法人
がんばろう福島、農業者等の会

http://www.farm-n.jp/fukushimafarmers/

設立年月：　2011年5月10日
理事長：　齊藤 登
所在地：　福島県二本松市

福島県内52の農家で構成するNPO法人です。
東日本大震災、特に福島県では原発事故により、農業にも様々な影響がありました。
私たちは、全国の消費者と直接「つながって」いくことにより、いわゆる「風評被害」を乗り切っていこう！ということで、震災直後の2011年5月に組織を設立しました。
ネットショップをつかったり、東京への数百回にわたる車を使った直販活動などを行い、今は、全国5000人以上の消費者とつながることができ、農産物の販売だけでなく、福島を訪ねていただける方も増えてきました。

NPOのモットウは「顔の見える関係に風評被害はなし！」
今後も30年先を見据え、農家と消費者がつながって、ふくしまの復興に取り組んでまいります。

主な活動内容

農産物の直販

ネットショップや車を使った直販などにより、全国の消費者に福島県産農産物を直接販売しています。最近は、毎月定期的に季節の野菜や果物をセットでお送りする「ふくしま新ブランド」も好評で、現在毎月300人以上のお客様にご利用をいただいています。
また、企業向けに、毎月お一人500円で一括して（50名様以上）季節の農産物を職場にお送りする「ワンコイン作戦」も好評です。

スタディファーム

福島の現状をご理解いただくには、福島の農家を訪ねていただくのがいちばんです。
スタディファームでは、「震災後、福島県の農家はどのような放射能対策に取り組んできたか？」について、農園内で詳しく説明しているほか、ご希望により農業体験なども行っていただいています。2016年にはこのスタディファームに約800人の参加をいただきました。今後は、世界中の人たちに来ていただきたいと思っています。

安全でおいしい農産物をつくるために

私たち農業者は「安全でおいしい」農産物をつくるのが基本です。このため、NPO独自で「有機的な肥料」の開発を行ったり、栽培技術向上のための研修会も行っています。
このような活動により、30年先を見据え、福島県が「世界いちばん安全でおいしい」農産物を産出できるようにするのが夢です。

活動において評価された点

審査委員　開沼 博 氏

風評払拭へ向け挑戦、
安心でおいしい福島の農産物づくり

ご承知の通り、福島の農業、一次産業は歴史上初めての困難に遭遇しました。
確かに福島第一原発事故により放射線の問題はありました。ただし最近では、農作物について、放射性物質の実害がないといっていい状態になっています。しかし風評被害というものがあります。
意識調査をすると、福島のものを避けるという人が一定数今でもいる一方で、もう気にしてない、（安全性を）説明してもらえば食べて応援したい、という方も増えています。
しかし、消費者ではなく、流通構造に問題の中心があります。福島の農産物を置かないという店が全国にあるのです。
今回は、そういう状況とどうやって闘っていくのかという試行錯誤を、いろいろな形でやっている団体を選ばせていただきました。
スーパーで棚が取れないなら、自分たちで直接信頼できるお客さんたちとの流通経路を作っていく、インターネットでそれを売る、あるいは外国に情報を発信する、福島産に不安を抱く方には、実際に来て農業体験のようなものをしてもらう……。
そういう活動内容をやっている方々は、かつてもいましたが、6年間やり続けて実績を出し、そして今また新しいことにチャレンジしているという方々は、そうはいません。
こういう団体に光が当たることによって、農業のブランド化や、安全性のアピールなどにしっかり取り組んでいくことは、日本全体にとっても非常に大切です。こうした取り組みを余儀なくされた福島で、先進事例として努力されている方々の活動は非常に尊いと思っております。
この度はおめでとうございます。今後も頑張ってください。

受賞者コメント

今回はこのような賞をいただきまして、ありがとうございます。
私たち NPOの会員は、（福島）県内52、原発周辺の農家もいますし、中通りもいれば、会津もいます。風評被害というのは、よくわからないけれども、自分たちが直接消費者と結びついて解決していくしかないということで、震災直後の（2011年）5月から、ずっと活動してきました。
やはり農業者の集まりなので、その活動がなかなか表に出てこないという面は正直ありました。そういう中で、今回この光大賞をいただき本当に嬉しく思います。
賞も嬉しいのですが、日本トルコ文化交流会の方がうちの農園まで来て、泥まみれの作業を見てくれました。帰り際には、「今度、セット野菜の箱詰めが忙しい時には手伝いに来ますよ」と言ってくれ、トルコの方は、またこの交流会は本当に温かいんだなと、そういう風に思っておりましたので、その意味でも今回の賞はすごく嬉しいです。
トルコの人とでも、日本の人とでも顔の見える関係というものを積み重ねていくことが、遠い道のりですけれども、風評被害というものを解決していくのだと思っています。
今日いただいたこの賞については、52の農家へ報告するだけでなく、フェイスブックで流したところ、全国の消費者の方々――今、5000人ほど福島県の農産物を買って応援してくださる方がいるのですが――から「おめでとう」という声もいただきました。
そういうつながりを今後も積み重ねて、より安全でおいしい農産物を今後も作っていきたいと思います。
本当に力をいただいたと思っています。誠にありがとうございました。

特定非営利活動法人
がんばろう福島、農業者等の会
理事長
齊藤 登さん

表彰式レポート

2017 年 2 月 27 日（月）、明治記念館にて
「エルトゥールル号からの恩返し　日本復興の光大賞 17」記者会見および表彰式が行われました。

記者会見

記者や関係者が見守る中、池上彰審査委員長から大賞 1 団体、特別賞 3 団体が発表されました。

池上彰　審査委員長

宮本信子　審査委員

開沼博　審査委員

長 有紀枝　審査委員

セルカン・チャーラル
nittoKAI理事
（ウグル・ユジェル審査委員の代理）

表彰式・懇親会

東日本大震災の犠牲者への黙祷から始まった表彰式は、武内陶子 NHK アナウンサーによる司会進行のもと執り行われました。来賓からの祝辞を賜ったのち、池上彰審査委員長による審査講評、引き続き審査委員が受賞者を表彰しました。

「日本復興の光大賞 17」大賞を受賞した「特定非営利活動法人 TEDIC」には賞状とエルトゥールル号が彫られたトロフィー、賞金 100 万円が、特別賞に選ばれた「3.11 絵本プロジェクトいわて」、「石巻専修大学　山崎泰央ゼミナール」、「特定非営利活動法人がんばろう福島、農業者等の会」の 3 団体には、それぞれ賞状とトロフィー、賞金 30 万円が授与されました。

前列左から、「TEDIC」の門馬さん、「がんばろう福島、農業者等の会」の齊藤さん、「石巻専修大学」の山崎さん、「3.11絵本プロジェクトいわて」の末盛さん。後列左から池上彰氏、開沼博氏、長有紀枝氏、宮本信子氏、ウグル・ユジェル。

表彰後には神宮前インターナショナルエクスチェンジスクール生徒とミュージシャンが復興支援ソング「花は咲く」、「Try Everything」、「Barış Güvercini」の 3 曲を、続いて IKUYO & Halk Kelebek ダンスグループがトルコ民族舞踊を披露、大いに盛り上がる中、閉幕しました。

歌手Asamiさんと神宮前インターナショナルエクスチェンジスクールの生徒たち

左から稲毛さん、岩崎さん、立岩さん、大平さん、石田さんご夫妻、鈴木さん、Asamiさん

トルコ民族舞踊を披露する IKUYO & Halk Kelebekダンスグループ

懇親会は宮本信子審査委員による乾杯の合図のもと始まりました。会場ではトルコ料理が振る舞われ、多くの参加者が熱気に包まれる中、会話や食事を楽しみました。

乾杯の音頭をとる宮本信子氏

ビュッフェ形式で並べられた様々な料理

来賓からのメッセージ

一般社団法人RCF 代表理事　藤沢 烈 氏

このたびは受賞されました皆様、本当におめでとうございます。私は 6 年ほど復興関連の仕事をやらせていただいていますので、今の状況について簡単にお伝えし、この賞の意義をご説明いたします。

震災から 6 年が経ち、復興は進んでいるように見えます。被災者の一番の関心事である住宅に関しては、98％が着工済みになっていますし、福島の沿岸にある富岡町という、今でも入ることはできても泊まることはできないところも、4 月 1 日には避難指示が解除される見込みで、住民の皆さんが住めるようになるそうです。

原発に近い大熊町、双葉町はまだ時間がかかりますが、当時避難指示が出された 12 の市町村のうち、10 までは解除されつつあります。

しかしまだ喜べない点は、災害公営住宅が完成しても、そこに移りたくない、仮設住宅に残りたいという方が少なからずいらっしゃることです。単身のお年寄りが一人で生きていくのは簡単ではありません。仮設住宅ではありますが、地域内でのつながりができてきています。また仮設住宅は、ボランティアなど外からの助けが入りやすくなります。しかし公営住宅に一人で移ると支援が途切れたり、もともと仮設住宅で親しくなった方となかなか会えなくなるなど、新しい喪失を生んでしまうという問題があります。

福島へは、確かに帰還が始まっていますが、多くの学校や働く場所が失われた状態です。そういう状況下では若い方々を中心に、戻りたくてもなかなか戻れない現実があり、復興は難しいと感じます。

現在は、「建物の復興」から「心の復興」へと課題がだんだん移り始めていると感じています。今回の「日本復興の光大賞」は、まさに目に見えにくい心の問題にアプローチされている、地味でも大変重要な取り組みに光を当てていて、大変意義のあるものだと感じております。本日、お集まりの皆様にも、そうした目に見えにくい心の問題に、引き続き注目をしていただきたいと存じます。

また、そうした活動に光を当ててくださっている日本トルコ文化交流会には改めて敬意を表します。

衆議院議員　大畠 章宏 氏

今日受賞されました、4 団体の皆様に心からお祝いを申し上げます。

最近、日本国内のさまざまなニュースを見ていて、心が躍るような、現実の社会を報道するニュースが少ない感じがいたします。

今日の（皆様の）お話を伺って、「一隅を照らす、此れ則ち国宝なり」という話がありますが、本当に素晴らしい行為をされている方々がいるということを改めて感じました。本来は日本政府がこういうところに着目して皆さんにお祝いを述べなければいけないかもしれませんが、トルコの方々によって、このような素晴らしい賞が 3 年に渡って授与されましたことを本当にありがたく思います。

これからも皆さんと一緒に日本とトルコ国が友好を深め、お互いに相手のことを思いやって世界の流れを変えていくという、そのスタートに今日の授賞式がなればと願っております。本日は誠におめでとうございます。

参議院議員　左藤 章 氏

トルコの皆さん方がこうやって我々（日本人）に対して長年、感謝の気持ちを持ち続けられている、こんな嬉しいことはありません。その友情に心から敬意と感謝を申し上げます。

また、4 団体が素晴らしい賞を授与されたことを、本当にありがたいと思います。

日本は残念ながら災害の多い国です。皆がしっかりと手をとり、力を合わせて復興する、そして仲間作りをして頂きたいと思います。

去年（2016 年）も台風で北海道・岩手は甚大な被害を受けました。その年末には、糸魚川の大火事もありました。我々（国と地方自治体）が一丸となり災害の対応をする、そしてこうしてトルコの皆さんから支援をして頂けるのは、本当にありがたい極みであります。

これからも日本とトルコの友好、それだけにとどまらず、様々な面での交流を深めながら、我々もがんばっていきたいと思っております。

改めて、審査にあたられた先生方に感謝を申し上げます。また日本トルコ文化交流会の益々のご発展を祈念いたします。そして皆さん方が地域で益々復興のための活動をがんばっていただけますよう心からお願い申し上げます。

本日は誠におめでとうございます。

衆議院議員　原田 義昭 氏

この「日本復興の光大賞」については最近うかがったことですが、本当に素晴らしいことです。（エルトゥールル号の遭難事故以降）何十年も民族同士がこうして行き来をしているということ、こんなに誇らしいことはありません。

世界中、政治も経済も多少混乱、激動の時代に入っておりますけれども、その中にあって、この日本とトルコが、またお互い手を組んで、世界中の平和と安定、さらに繁栄を目指さなければいけないと思っています。

今日のこの大賞に心からお祝いをすると同時に、これをまた新しい出発点として、皆さん方がご活躍いただけますことをお祈りいたしまして、ご挨拶といたします。

本当に今日はおめでとうございました。

メディア紹介

第3回「日本復興の光大賞17」に関する掲載記事をご紹介します。

絵本で支援 特別賞
日本復興の光大賞
3.11絵本プロジェクト（盛岡）受賞
（岩手日報2017年2月28日付朝刊より）

絵本で支援 特別賞

日本復興の光大賞

3・11プロジェクト（盛岡）受賞

【東京支社】東日本大震災の地道な復興支援活動を続ける民間団体をたたえる「第3回エルトゥールル号からの恩返し 日本復興の光大賞」の表彰式は27日、東京都内で行われ、盛岡市の3・11絵本プロジェクト（末盛千枝子代表）に特別賞が贈られた。

主催するNPO法人日本トルコ文化交流会のウケル・ユジュル理事長、ジャーナリストの池上彰審査委員長があいさつ。審査委員の女優宮本信子さんが「子どもたちが一生懸命本を抱く姿に感動した。本を読んで子が励まされ、大人も元気になる」と末盛代表をたたえた。

同プロジェクトは全国に呼び掛けて集めた絵本や「えほんカー」の寄贈、読み聞かせ、被災した図書館への協力など幅広い活動を行っている。

末盛代表は「集まった本に日本中の人が希望を託している。海外から寄せられた共感に世界中の方が困難の中で生きていることを実感した」と活動への思いを語った。

同賞は、明治時代にトルコの軍艦エルトゥールル号が和歌山県沖で沈没した際に支援を受けた恩返しとして2015年に創設された。大賞には子どもの貧困や不登校問題に取り組む宮城県石巻市のNPO法人TEDICが選ばれた。

宮本信子さんから特別賞のトロフィーを受け取る末盛千枝子代表（右）

「農業者等の会」特別賞
風評払拭へ挑戦続ける
日本復興の光大賞
（福島民友新聞2017年2月28日付朝刊より）

日本復興の光大賞

「農業者等の会」特別賞

風評払拭へ挑戦続ける

NPO法人日本トルコ文化交流会（ウケル・ユジュル理事長）は27日、東日本大震災からの復興に向けた活動を展開する民間団体を表彰する第3回「日本復興の光大賞」の受賞団体を発表した。本県から「二本松市のNPO法人『がんばろう福島、農業者等の会』（斉藤登理事長）が特別賞に選ばれた。

「がんばろう福島、農業者等の会」の受賞理由について、審査委員の立命館大衣笠総合研究機構准教授の開沼博氏（社会学、いわき市出身）が「福島の生産者は、安全が検査で確認されているにもかかわらず風評被害への対策は終わっていない」と指摘しながら「同会は根気強く市場の中に自分たちのルートをつくるためのほか、今回の表彰では、大賞にNPO法人TEDIC（宮城県石巻市）、特別賞に石巻専修大山崎泰央セミナール（同）と3・11絵本プロジェクトいわて（岩手県盛岡市）が選ばれた。

同賞は、1890（明治23）年に和歌山県沖で遭難し、地元住民が人命救助に奔走したオスマン・トルコ帝国の軍艦「エルトゥールル号」にちなみ、日本、トルコ両国友好親善の礎となった同遭難事件の恩返しとして創設された。

開沼氏から記念品を受ける斉藤理事長㊨

同日は東京で授賞式が行われ、開沼氏から斉藤理事長に表彰状を手渡した。この被害なし」をモットーに、県内の農園を訪ねても評価を越えようと設立したNPO法人で、現在は県内52の農家が参加している。

「顔の見える関係に風評被害を互いに協力して乗り越えようと設立したNPO法人で、現在は県内52の農家が参加している。

消費者と信頼関係築く

「がんばろう福島、農業者等の会」は、生産者が風評被害を互いに協力して乗り越えようと設立したNPO法人で、現在は県内52の農家が参加している。

「顔の見える関係に風評被害なし」をモットーに、県内の農園を訪ねても客さまとつながりながら一つ一つ解決していくしかない。息の長い活動になる中で、受賞は勇気づけになった」と喜びを語った。

復興の光大賞に「TEDIC」
宮城のNPO
（毎日新聞2017年3月1日付朝刊より）

復興の光大賞に「TEDIC」

宮城のNPO

東日本大震災の被災地の復興に尽力した団体をたたえる「日本復興の光大賞17」（日本トルコ文化交流会主催）が2月27日発表され、経済的に困窮した子供らの支援活動を行うNPO法人「TEDIC」（宮城県石巻市）が大賞に選ばれた。

明治記念館（港区）で同日夜に表彰式があり写真、審査委員長でジャーナリストの池上彰氏が「子供の貧困の問題は今後も続く。未来を支えるため頑張っていただきたい」と激励。同法人代表の門馬優さん（28）は「学校や家庭で光が当たらない子供たちに、光を当てられるような活動を続けたい」と語った。

同大賞は、1890（明治23）年に和歌山県串本町沖で沈没したトルコ軍艦「エルトゥールル号」の乗組員を地元の人が救出した恩返しとして同交流会が創設し、今年で3回目。

特別賞は以下の通り。3・11絵本プロジェクトいわて▽石巻専修大学山崎泰央セミナール▽特定非営利活動法人がんばろう福島、農業者等の会

【松井聡】

nittoKAIとは

特定非営利活動法人 日本トルコ文化交流会（nittoKAI）は、様々なバックグラウンドや価値観を持つ人達が交流し、互いを認め合い、尊重し合えるような社会空間を作り出したいという理想のもとに、2006 年に創設されました。
日本とトルコという二国間の関係のみに限定せず、異なる文化、民族・人種 、宗教に属する人々が同じ地球市民として交流・対話ができる場を作ることで、世界平和の促進と実現に貢献することが私達の望みです。

当会では、多岐にわたる活動を行っています。各界の専門家や著名人を招いて開催する講演会では、社会が抱える様々な問題について皆様と情報共有・意見交換を図ります。文化交流活動として開催する展示会や演奏会では、美術や音楽、文学などの芸術を通して、人類に共通する普遍的な価値観に共感し、互いを感性の面から理解し合えることを期待しています。中学生・高校生を対象とする作文・絵画コンテストも毎年開催し、子ども達にテーマに基づいた創作の場を提供しています。国際協力と相互発展に寄与する有意義なプロジェクトに携わる方々に対しては、国際的な学会・会議への参加や、専門施設への見学などのアレンジも行います。また相互扶助の精神が世界平和に何よりも必要なことと考え、東日本大震災や熊本大地震をはじめとする、地震や台風などの災害や戦争・紛争によって傷ついた人々や地域に対し、物資の送付や必要に応じた援助活動を行っています。

私達 nittoKAI は、日本とトルコの関係という一つの入口から歩み出した友情の絆を、皆様のご支援とご協力を頂きながら全世界へと広げていきたいと願っています。

各種セミナー等を開催

nittoKAI

「第4回中高生のための作文・絵画コンテスト」授賞式

2016年、熊本地震・被災地での炊き出し